

六花



俳句雑誌りつか

2014 (平成26年)

cover design Yuna Mizuno

10



しん
親

ka

山田六甲

後ろより袖を引かるる祭かな
鹿の角沈んでゐたる滝の水
団扇とはをみな言葉とおもひけり
寝子^{ねこ}ちゃんの飛びあがりたるすいつちよん
夏の果まゐると文の結びかな
湯の窓の月に手のとどきたる守宮
無花果の力を抜けば剥けにけり
老の日や吾は七十母九十四
鈴虫の朝のひと鳴きやみにけり
鈴虫にすずちゃんといひ霧吹きぬ
姿よき声して朝の鈴虫は
鈴虫は朝のかつを捕へけり
鈴虫に耳洗はれてをりにけり
一匹を生き残りたる月鈴子

湯の湧いてくるごとき澄み鉦叩
埋められぬ穴一つあり月の風
鐘叩背中の壁に響きけり
満ち潮の巖に満つる秋の声
栗剥きの角痛けれど夜や愉し
身に入むや昼に足の指曲げて
天高し足の運びも自ずから
雨あとを月の飾れる大樹かな

ことり死去・満三年祥月命日

揺蕩たゆとうて十月十二日の汀
秋薔薇指の血玉の美しき
身に入むや赤目の龍の帯留に
死ぬほどに退屈な耳天の河

青鷺のおほどかにとぶ吉備路かな
ひとゆれの葦に沈みし行々子
浮草の途切れず水の流れけり
木下闇ふりむくたびに耳聴く
下闇に入りて五感のゆるびけり
日雷鯉は大きく身をかはし
青葡萄触れなば弾き返しくる
茎太く向日葵のみな傾ぎをり
蓮の花どの畦からも届かざる
とんばうの群の高さに戻り来し

涼しさや掌ほどの湖の波

市川伊團次

朝焼けを賑ふ雀街の角

夕焼けに雲の動きのなかりけり

涼しさや掌ほどの湖の波

銀蘭の閑かな風を呼び寄せぬ

空蝉を粉々にして風の中

すずしさやてのひらほどのうみのなみ いちかわいだんじ

最近の六甲は有頂天になるほど倅せ。

六花の多彩な人材が湧出してきて留まる
ところを知らず。

「夕焼けに雲の動きのなかりけり」を夢
風撰に推薦しようと思つたが、こんな手
駒があつたとは。

比喩の失敗をを嫌う六甲も手放して眷
めよう。湖の波を掌ほどの涼しさと同例え
た大手柄である。もちろん湖に立つ波が
てのひら大であるうはずがなく。掌ほど
にささやかな涼しさを感じたのだ。目は
なく胸でつかみ取つた涼しさの例えなの
だ。胸で感じるのは女性が多いが、女性
以上の感受性が詩を生んだのだ。滋賀県
大津堅田での作。

夏帽子とれしリボンの跡のあり

佐津のぼる

なつぼうしとれしりぼんのあとのあり さつこのぼる

重なれる影からも薔薇香りけり
深梅雨の冥さに鯉の浮いて来し
黄昏の空を蝙蝠ばかりとぶ
夏帽子とれしリボンの跡のあり
とびついて草と揺れゐる糸とんぼ

この夏帽子に着いていたリボンほどのような色でどのようなデザインなのか、また帽子の色は形はと想像が次々と広がっていく。のぼるはいつでもこのような句を作れるが、今まで爪を隠していた。だから、今までは六甲が俳句に必要なことを指摘させる隙を作ってくれていたにちがいない。「リボンがあったことをどうして判るの？」と質問されたら、こう言うだろう「リボンのあった箇所は日に焼けて居ないからだよ」と。つまり充分日除けの役目を果たした帽子なのだ。その帽子をもう一度使っている人の姿まで見えてくるのではないか。神戸トアロード、マキシんで作った帽子に違いない。

友の手に蛍こぼして何か失す

升田ヤス子

友の手に蛍こぼして何が失す

峡の湯の熱りを冷ます蛍狩

草濡れて平家ぼたるの休む土手

雨やんで尾鰭の張りの金魚草

眼科医におとがひあづけ半夏生

とものてにぼたるこぼしてなにかうす　ますだやすこ

蛍の一匹を友達の手のひらに移したとたん、突然原因不明の喪失感が襲ってきた。おそらく蛍の持っている霊力が抜けていったに違いない。蛍の本意は火や灯であるがその中には靈魂という含みもある。それが闇に舞う蛍の魅力であり、その妖しに人々は古くからあこがれたり畏れながら親しんで来た。一種幻想の夜をこのように詠めたのは、ヤス子の清新な精神風景でもある。原句は掌だったが手で充分意図は通じるので手と推敲した。以前のヤス子なら靈魂をこぼした、とか魂をこぼしたと言ったであろう。が蛍その物で表現したのが大進歩である。この句覚えやすく、口ずさみやすい。

雪卿集

蛩

永田万年青

寄り添ひて互いに点る蛩かな
ほうたるの限りある夜を舞ひにけり
捕らへたる指間にこぼれ蛩の火
幽玄の闇を彩る蛩かな
酉日差し褪せし御堂の閉ぢらるる

文化の日

貝森光洋

夫婦して揃いの紋付文化の日
秋燕のしきりに別れの舞を舞う
綿飴のように膨らむ夏の雲
墓洗う死んでも妻に言えぬこと
人間に野分の吹きて終り知る

雪卿集

滝
出口
誠

手まり花緑に青のまじりけり
白鷺の黄色の足が水に入る
街灯のともりしままの木下闇
何段も岩にぶつかり滝生まる
岩重ね滝の中にも滝作る

端居
志方
章子

夏蝶の車窓ついてゆきにけり
炎天に光る山家の黒瓦
老ゆること老いつつ学ぶ端居かな
あぢさゐは和菓子の名前夏座敷
ほうたるを追へば更なる真暗がり

雪樹集

湖国

藤生不二男

五月雨の湖国の旅を継ぎにけり
梅雨空の湖に沿ひゆく湖西線
さみだれに竹生島かすみて過ぎにけり
暮れ初むる湖^{うみ}をゆさぶる牛蛙
行々子雨の湖北を離れけり

滝

筒井八重子

滝壺に落ち来る水の涼しかり
木下風受けて楽しむ滝涼し
滝の水八月空は曇りかな
滝水に両手をつけて顔に当つ
滝離れ今すつきりと心晴

蛍雪譚

六甲選

俳句には生長痛がある。

二十六年九月号鑑賞

九月号「雪嶺集」で政子作品を一部七月・八月と重複して掲載した。これは五句から十句にするため追加したときの編集ミスによるものでお詫びしたい。なお出口誠の作品「湿りたる土を運びて夏の蝶」は「運びて」ではなく「運びて」だったので訂正してお詫びする。

青鷺のおほどかにとぶ吉備路かな

笹村 政子

青鷺は、白鷺といわれる小鷺の類いと比べれば大型で、自ずと飛び方もおどか(ゆつたりとした様)に飛ぶのだが、そういうことにとらわれず、吉備の国らしいなあと感じているのだ。重箱の隅をつつくような事を忘れて、ここは、のさつと羽根を広げて飛ぶ青鷺の雰囲気味わえはいい。宮本武蔵が「五輪の書」水の巻で述べた「心を真ん中におく」イメージを掴んだ。政子に、技巧を棄てこのような味が見えてきたことは非常に好ましい。

浮草の途切れず水の流れけり

この句も心を真ん中において観ている。平凡な写生句のように見えるが「途切れず」に弛まぬ精進のあとがある。滔々として水は途切れず、浮草も流れに途切れぬほど沢山生うている状態が間に匂い、飯尾宗祇の発句を思いおこすような句の大きさがある。三ヶ月ほど前まで俳句に行き詰まったようなことを言っていたが、上の梓欄に「脳はねずみ算式に発達」と書いているとおり。何かを掴みかけて、ぐんぐん伸びている状態が頼もしい。「雪嶺集」をもうけた所以。(以下略)

六花集

住田千代子

次の実を目で追うてをり袋掛
桃の香をほのかに詰めて袋掛
袋掛け産着を着せる手つきして
沙羅双樹豆粒ほどの蕾かな
退院の赤子に日傘差しやりぬ

廣畑 育子

蛭の這ふ葉指透けて来し
熟れすも酸い顔してもぎにけり
蛙合戦良く通る声くぐもる声
夏霧の隠してゐたる山の間
汗の子に追はるる牧の羊かな

平居 滯子

花菖蒲疾く闇下りぬ濃紫
花菖蒲剪りおかれたる橋の濡れ
おほかたは器量良しなる今年枇杷
わが息と同じリズムに滴れり
それぞれの発心胸に夏至の宿

秋田

典子

子燕を通りすがりの母子と見る
おいたして裸足で逃げる内弁慶
描きたての提灯下がる梅雨晴れ間
水馬流されつつも進みをり
迷はずに花付き胡瓜買って来し

大内 幸子

火取虫朝毎敷居掃き出しぬ
鮎掛の等間隔の瀬音かな
庭陰に羽黒蜻蛉の棲かな
羽黒蜻蛉高くは飛ばずまた陰へ
編み上げて精霊舟に手を合はす